

# 『アモス：今もここにある飢饉』

私達の多くは日本からやってきました。その日本には地続きの国境がありません。そんな国土が日本を長い間、外敵から守ってきました。しかし、多くの国には地続きの国境があります。時に敵国がこの国境を越えて他国を侵略するということがあり、そのようなことはこの世界において幾度も繰り返されてきました。そして、これらのことはこれからも起きかねないことで、近い将来、現在の世界地図が書き換えられるということがあるかもしれません。

これまで私達はイスラエルの初代の王、サウロから始まり、ダビデ、ソロモンによるイスラエルの統治について見てまいりました。この三人の王とて人間、色々な失敗を繰り返しました。同時に彼らと同時代のイスラエルの民の心も神から離れ、彼らを守り導き、祝福していた神の存在を脇に置き、各々がそれぞれ自分の思いのまま、欲のままに生きるようになりました。

ゆえに彼らは除々に力を失い、イスラエル王国は紀元前933年に南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂し、北イスラエルは紀元前722年にアッシリアに、南ユダ王国は紀元前586年にバビロンによって滅ぼされます。そして言うまでもなく現在の世界地図にはアッシリアもバビロンもありません。これらの国もまた別の国によって滅ぼされたからです。

そのような時代に北イスラエルに生きた人にアモスという預言者がいました。今日はその預言者アモスとその時代のイスラエルの民の姿を見ていきたく願っています。ちょうど4月13日から21日まで教会の聖書通読表はこのアモス書で、毎日、このところから主の言葉を糧としていた方達もいることでしょう。

常に周辺の大国の存在によって脅威にさらされていた北イスラエルですが、アモスの時代はちょうどエジプトやアッシリアという大国が勢いを失っていた時で、その隙をぬってしばしの繁栄が築かれました。このように他国との関係によって、国に一時の繁栄が訪れるということ、その様はまさしく今日の世界と同じです。しかしながら、そのアモスの時代の繁栄の背後には心の荒廃、すなわち不正な裁判、弱者からの搾取、賄賂というような不正が横行していました。これらのことも昔と変わらず今もなくなることはありません。

そのような時にアモスは神様からその闇を明るみにし、これらのことゆえにイスラエルに裁きがなされるということを繰り返し民に向かい語りかけるように示され、彼はその言葉に従いイスラエルに向かって語り続けるのですが、彼らの心は変わらず、やがて北イスラエルはアッシリアの侵略を受けて、滅びていくのです。

エルサレムの10マイル南にありますテコアという小さな村の出身であったアモスは、そこで羊を飼う「牧者のひとり」（1章1節）であり、「いちじく桑の木を作る」（7章14節）農作業に従事する人でした。彼は資産家でも地主でもなく、また祭司でもなく、ただ雇われて羊を飼い、桑の木を育てる日雇いの農夫であったようです。そのような彼に神様は『行って、わが民イスラエルに預言せよ』（アモス7章15節）とられました。

私達がどこかの団体の一員となり、そこに長く在籍していると色々なしがらみに縛られてきます。すなわち同じグループのメンバーの手前、自分が思っていることを言うことができなくなったりするのです。しかし、このアモスにはそのようなしがらみがなく、自分の言葉を聞いた人達がそれを聞いてどう思うとか、それにより他の人達との関係が悪くなるというようなことは一切、考えることなく、ただ神が彼に示されたことを大胆にはばかることなく語り続けることができたのです。彼は言っています「ししがほえる、誰が恐れなくていられよう。主なる神が語られる、誰が預言しないでいられよう」（アモス3章8節）。アモスはまさしく、孤高の獅子のように神から受けた言葉を語ったのです。

アモス書によりますと当時のイスラエルでは富める者が貧しいものから搾取して、己が繁栄を築くということがいたるところでなされており、ナジル人という神に仕えるために誓願をたてて禁欲的に生きていた者達に無理に酒を飲ませたり、神の言葉を取り次ぐ預言者に対しては「預言をするな」とそのはたらきを妨害していたといえます（アモス2章12節）。また彼らはユダヤ民族ですから、彼らには先祖代々なされてきました安息日の取り決めがあり、その安息日には思いを神に向けて過ごすことが求められていました。しかし、彼らはその安息日の最中にありながら、心の中でこんなことを考えていました。『新月はいつ過ぎ去るだろう、そうしたら、穀物を売ろう。安息日はいつ過ぎ去るだろう。そうしたら、われわれは麦を売り出そう。われわれはエパを小さくし、シケルを大きくし、偽りのはかりをもって欺き、乏しい者を金で買い、貧しい者をくつ一足で買い取り、また、くず麦を売ろう』（アモス8章5節-6節）

これを今日に当てはめて考えますのなら、私達が礼拝に出席しておりながら、その心を神に向ることなく、その最中、不正の商いについて考えていることであり、実際にその不正の商いによって繁栄を得ているということです。このようなことは人の目を騙すことはできますが、これら一切のことを神は存じておられ、アモスはその神様からの言葉を受けて、彼らに対する警告と裁きを語り続けたのです。

アモスは神からの言葉を受けてこう言いました。6 主はこう言われる、「イスラエルの三つのとが、四つのとがのために、わたしはこれを罰してゆるさない。これは彼らが正しい者を金のために売り、貧しい者をくつ一足のために売るからである。7 彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、苦しむ者の道をまげ、また父子ともにひとりの女のところへ行って、わが聖なる名を汚す。8 彼らはすべての祭壇のかたわらに質に取った衣服

を敷いて、その上に伏し、罰金をもって得た酒を、その神の家で飲む」（アモス2章6節－8節）。

彼らは自分のしたい放題、聖なる場所さえも汚して、吹けば飛ぶような繁栄の上に身をおいている。しかし、時が来たらこのようなことが起こると主は彼らに語られたのです。

14 速く走る者も逃げ場を失い、強い者もその力をふるうことができず、勇士もその命を救うことができない。15 弓をとる者も立つことができず、足早の者も自分を救うことができず、馬に乗る者もその命を救うことができない。16 勇士のうちの雄々しい心の者もその日には裸で逃げる」と主は言われる（アモス2章14節－16節）。

物事が全てうまくいっている時、私達は速く走れるから、強いから、力があるから、勇敢だから、弓を持っているから、足早だから、馬に乗るから、雄々しい心を持っているから大丈夫と思います。しかし、それらのものがどんなに頼りないものであるかということがここには記されています。そう、主と共に歩む信仰はある意味、このことの自覚から始まるのです。「全てのことはこの自分の手にかかっている」ということは勇ましい言葉です。しかし、それはいかほどのもののでしょうか。少し状況が変われば、これらのものはいとも簡単に失われていくのです。

しかし、それでも彼らは主の言葉に耳を貸すことなく、その言葉は紀元前722年のアッシリアによるイスラエルの滅びによって成就しました。そして、そのことがいよいよイスラエルに臨む時に、ある飢饉がイスラエルの民達を襲うだろうとアモスはこう預言しました。

11 主なる神は言われる、「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもでもない、主の言葉を聞くことのききんである。12 彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう。その日には美しいおとめも、若い男もかわきのために気を失う。（アモス8章11節－12節）。

彼らが所持していたものが失われる時、すなわち、彼らが力を失う時、と言いますか、そもそも人のもつ力というものはたかがしておりまして、己（おのれ）の無力について本当の理解に至ります時に私達は心に渴きをもちます。そして、その渴きとは神の言葉を聞くという飢饉だと聖書は言うのです。

この言葉はイスラエルの民に向けられた言葉ではありますが、そのまま今を生きる私達にも当てはまります。今日、私達は世界の他国に比べるなら豊かな国に暮らしています。家の食物は今朝でなくなり、今晚から食べるものが全くないというような方はいませんでしょう。いいえ、かえって私達は今日、食べる量を減らさなければならぬほどに飢えからは程遠い世界に暮らしています。そのような意味で私達は現在、飢饉の中にはい

ません。しかし、たとえ私達の胃袋は満たされていても、私達は主の言葉を聞くことの飢饉のただなかにいるのだとこの言葉は私達に語りかけます。

私がかリフォルニアに来ました19年前、日本のスーパーに行きますとそこに置かれていた日本語の無料雑誌を全て家に持って帰り、隅々まで読みました。きっと日本語に飢えていたのでしょう。しかし、思い返せば今は当時のような日本語に対する飢え乾きはなくなりました。なぜならその後、インターネットの普及により、外国にいながら私達はいくらでも日本語に触れることができるからです。そうです、インターネットには言葉が満ち溢れており、こちらも口を通して入る食物と同じように、制限をつけないと溢れんばかりの情報で混乱してしまいそうです。そして、これだけ言葉が出回りますと、言葉の価値が失われてきているように感じるのです。しかし、聖書の言葉は今日もその価値を失うことはありません。失うどころかこの言葉によって今日も世界で無数の人たちがその言葉の中に真（まこと）を見出しているのです。

イエス・キリストはかつて御霊に導かれて一人、荒野に行かれ、四十日四十夜、そこで食を断ち過ごしました。当然、イエス様は空腹を覚えられました。その時にサタンが近づいて来て「あなたが神の子なら、この石がパンになるように命じなさい」と言ってイエス様を試みたと聖書は記しています。イエス様はこの試みに対して「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」とこのサタンの試みを退けられました。

そして、このイエス様の言葉にはある背景がありました。この時からさかのぼるところ約1400年前、エジプトで奴隷の状態であった数百万にもおよぶイスラエルの民は、エジプトを脱出してから40年もの間、荒野を放浪しました。そして、その40年が終わりに、一つ所に彼らが定住するようになった時、その民のリーダーであったモーセは荒野での年月を振り返ってイスラエルの民のために神が毎朝、天から降らせてくださった食物について語りました。

2 あなたの神、主がこの四十年の間、荒野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならぬ。それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。3 それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった。（申命記8章2節－3節）。

皆さん、想像してみてください。私達の家々に毎朝、空から食物が降ってくるということを。その食物には私達の肉体に必要な栄養が十分に含まれており、それを食べている限り私達は飢えることなく、普通に生きながらえることができたとしたら。しかしなが

ら、ここで多くの私達が思うことは毎日、同じものを食べ続けることは嫌だなということで、実際に同じことをこの時のイスラエルの民達も不満として言い続けました。しかし、彼らは大切なことを忘れていました。その時に彼らが置かれていた場所は周囲数十マイル、人が食べることがものなど何もない荒野で、しかもそれは五人家族の話ではなく、数百万におよぶ民が、そこで毎食の食物を得ることは不可能なことだったということです。そのような場所におりながら、働かずとも与えられる食物は本来、彼らにとってどんなに大きな祝福であったことでしょうか。

そのようなありがたいことが彼らには起きていたのですが、不思議なことにこの申命記は神は「あなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた」と書き、それは「人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることあなたたちに知らせるためであった」と言っているのです。なぜなら、お話ししましたように彼らは毎日、無償で与えられるマナによって決して満たされることなく、このマナに対して不平不満を神様に向かって言い続けたと聖書は記しているからです。

そうです、この彼らの心によって、人間はただ必要が十分に与えられていればいいという存在ではないということが明らかになったのです。そうです、食べるものが満たされていればそれで人間はいいかということ、そのことだけでは人の心は本当に満たされることはないのです。この現象は私達の世界でもいたるところで見ることができるといえます。いいえ、私達が自分の心に手を当ててみれば、まさしく彼らの心は私達の心なのです。

この言葉をイエス様が申命記から引用した時、イエス様の荒野での40日の間に天からマナが降ることは一日もありませんでした。故にイエス様は極度の空腹の中におりました。しかし、イエス様はそのような状況の中に身を置きながらもこの真理を理解し、その言葉をもってサタンの試みをはね返したのです。

この申命記の言葉は人がその肉体のために糧を十分に得たとしても、それだけで人間は生きていくのではないということが、40年かけて数百万数もの人間に対してなされたことによって明らかにされたという証言なのです。そうです、人はそもそも肉の糧で満たされるように創られているのではなく、神の口から出る言葉によって生きることができているということです。

詩篇は『1 もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。2 この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる。3 話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに、4 その響きは全地にあまねく、その言葉は世界のはてにまで及ぶ』（詩篇19篇1節-4節）と記しています。神の言葉は既にこの世界に満ちています。私達が天を見上げる時、この世界は神の言葉によって創造されたもので満ち

ています。そして、それはすなわち神の言葉がこの全地に満ちていることを意味しているのです。私達は神の言葉に取り囲まれており、その神の言葉を聞くことにより本当の意味で私達は生きることができると聖書は語り続けているのです。

もし、皆さんの中に自分の日々の暮らしに必要なものは全て満たされている、しかし、何か足りないと感じている方がいましたら、その足りないものをあれやこれやと色々なことで満たそうとしてきたけれど、どれもこれもそこにはいたらなかったと思われている方がおりますのなら、それはとても健全なことです。また、これまで寄り頼んでいたものが失われ、そのはかなさを今、しみじみと感じているという方がありましたら、それはその方にとって最も重要なことを知ることができるチャンスです。そのような方達にこのアモス書の言葉を今朝、お送りしたいのです。『あなたの神に会う備えをせよ』（アモス4章12節）。『あなたがたはわたしを求めよ。そして生きよ』（アモス5章4節）。

今日（こんにち）私達が生きている時代はイスラエルが裁きの宣告を受けた時と同じような様相をしています。私達を取り巻く世の言葉は彼らの何千倍となりますでしょう。しかし、それであっても今も神様の言葉を聞く飢饉がこの世界をおおっています。世の言葉は私達を取り囲み、私達の間をすりぬけていきます。有り余るほどの食にありつき、限りなく便利な時代に生きながら、私達の心は安んじているのか、満たされているのか、いいえ、私達の心はさらにさらに渇きを感じているように思うのは私だけでしょうか。私達はその渇きを満たすためにあれか、これかと日々、奔走しているのではないのでしょうか。

最初に私はイスラエル王国は紀元前933年に南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂し、北イスラエルは紀元前722年にアッシリアに、南ユダ王国は紀元前586年にバビロンによって滅ぼされ、現在の世界地図にはこのアッシリアもバビロンもないとお話ししました。なぜなら、これらの国もまた別の国によって滅ぼされたからです。

しかし、イスラエルに関して言えば、彼らは二つに分かたれた南ユダ王国のユダヤ人が紀元前536年にバビロンの捕囚からエルサレムに帰還し、かつての場所に再度、彼らの国を再建します。しかし紀元70年、ローマによってエルサレムは再び陥落し、彼らは以降、世界に離散していきます。しかし、それから1900年後、すなわち1948年5月14日、ユダヤ民族はかつて先祖たちが生きた土地に戻り、国を再建するのです。国が起り、消えていくということを常としてきた人類史の中で1900年もの年月を経て、同じ場所に国が再び建国されたといことは、言うまでもなくこのイスラエル以外にはないのです。しかも、彼らは世界中に散らされていながらも、その先祖がもち続けた言語と信仰を保ち続け、それらを持ってかつての土地に帰ってきたのです。神はいないということであるのなら、私達はまず、このユダヤ人の歴史に起きた全てのことを「神」という言葉を使わずに説明しなければなりません。

しかし、私達はこのようなことを聞いても驚かないのです。アモス書は一章から八章までイスラエルの罪を非難、警告し、彼らが滅亡するということを預言しています。しかし、この書はその一番最後の九章をこの言葉をもって閉じていくからです。

13 主は言われる、「見よ、このような時が来る。その時には、耕す者は刈る者に相継ぎ、ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。もろもろの山にはうまい酒がしたたり、もろもろの丘は溶けて流れる。14 わたしはわが民イスラエルの幸福をもとに戻す。彼らは荒れた町々を建てて住み、ぶどう畑を作ってその酒を飲み、園を作ってその実を食べる。15 わたしは彼らをその地に植えつける。彼らはわたしが与えた地から再び抜きとられることはない」とあなたの神、主は言われる（アモス9章8節—15節）。

アモスが実際に向き合い、神の言葉を語り続けました北イスラエルのユダヤの10部族はその後、回復されることなく、失われてしまいました。しかし、先ほどお話ししましたように、もう一方のバビロンに捕囚として連れていかれた南ユダの二部族は捕囚からの解放によりこの地に残り、エルサレムに帰還します。このアモスの九章の預言はそのバビロンから解放されたイスラエルの二部族の帰還とその後の再建をあらわしていると言われていますが、ここから私達が分かりますことは、この主の御目はその再建以降も、確かにイスラエルの上に注がれ続き、その主の御手のわざにより、今日もイスラエルという国がこの地上に存在し続けているのです。その存在自体が人類の奇跡なのです。確かにイスラエルは自らが成したことゆえに、神から罰を受けます。しかし、この世界の真の支配者はそのイスラエルを決して忘れることはありません。実際、その言葉どおりのことがこの世界で私達の前に起きているのですから私達はこの神の言葉を否定することはできないのです。私達が語り継いでる言葉とはこの神の言葉であり、この言葉だけが私達の心を満たし、私達の生きる道を指し示すものなのです。

皆さんの人生、何に土台を置き、何に委ねておりますか。言うまでもありませんでしょう、私達に必要なのは、この全能者なる神の言葉なのです。今こそ、この世界にあって私達はこの神の言葉を聞くべきなのです。主にある皆さん、この朝、もう一度、この主の言葉に聞き従うという再献身をしませんか。これからの人生の土台を探し求めている方がおりましたら、この神の言葉をその土台となさいませんか。お祈りしましょう。